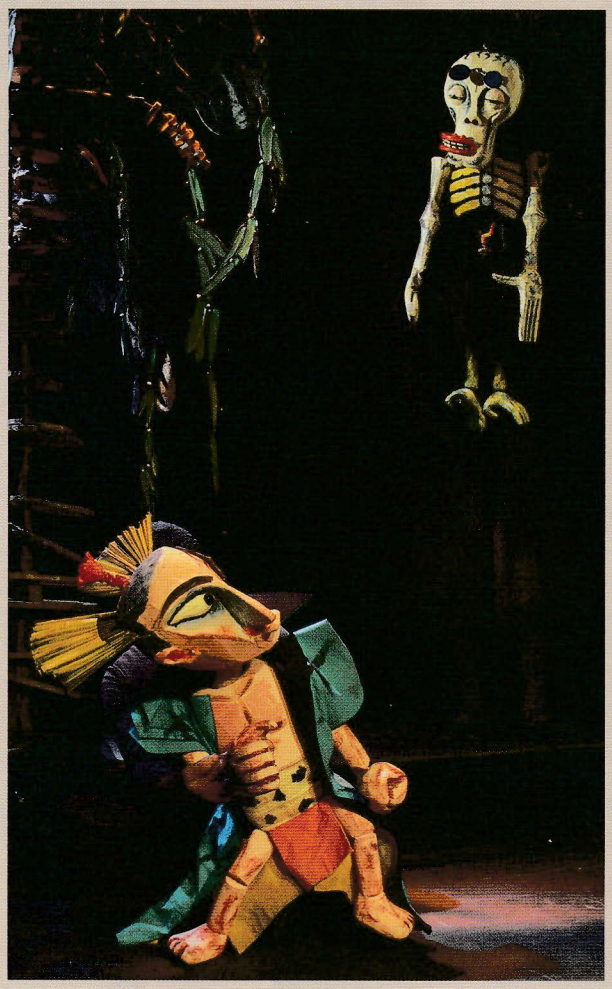

「運と不器用と幸せと…」　脚色・演出 柴崎喜彦

時折思う。人生というのものは、シナリオに縛られていて、あがいたところで運を持っている奴には敵わないのではないか。持ってる奴は幸せに、持ってない奴はそれなりに…。仏教では、「縁起」ということを説き、例えば現在の幸、不幸は、過去世あるいは現世での良い悪い行ないの結果だと解される。人生は因果律によって支配され、努力やあがきではどうしようもないもの…。運を"持ってない"ものは、幸せにはなれないのだろうか…。

人間は不器用だ。生きることも死ぬことも、自分の意思だけでは自由にいかないこともある。同じく不器用な人形たち。自分の意志では1ミリも動けない。だからこそ、そんな人形たちで不器用な人間たちを描いていきたい。軽妙に、ユーモラスに。人形たちの多様に変わらぬ表情が、舞台の上ではきっと心の動きを魅せてくれる。"持って"いなくともあがいた人間模様を魅せてくれる。

人は、何をもって幸せなのか…。"幸せ"を絶えず望み、あがき、努力する。多分、そのあがいたことも人生にとって幸せになり得るのだろう。生きるバイタリティー、生きていこうという意志、それが人の"幸せ"につながっていると信じている。

あらすじ

「ついてねえ、ついてねえ…」と賭け事にあけくれる貧乏薄幸の男のところへ、ひょんなことに死神が現れた。

「おめえさん、医者になってみねえか?…。」

男は、死に取り憑かれた重病人たちを言われたとおり治していき、瞬く間に大金持ちへ。

生活は一変し、横柄厚顔無恥へと変貌します。やがて金も全て失った男は、

もう一度死神の元へ…。そこで死神がはなった言葉は…。

アンケートより

・見入ってしまいました。戯曲的でとても楽しかったです。欲に対しての人間の感情を、皮肉に込めた作品だと思いました。演技などとても軽妙で、自分の中に入ってきた感じで良かったです。

・人の本性をうまくディフォルメした魅力的な造形の人形と軽快な動き、ウィットに富んだ科白で大笑いしました。人形劇はなんとなく子ども向けという先入観がありましたが、操る方の熟練の技に感嘆いたしました。

・ブラックユーモアな落ちが人形だからみていられる、笑える。「死」に関することは案外人形劇向きなテーマかもしれない。顔の左右で表情が異なる人形が表現力豊かで、面白かった。回り舞台というのも、高さがありそのまま座敷になったり長屋になったり、 回す早さが自由自在なのも舞台が広がった感じがした。

youtubeで『死神』の舞台映像を少しだけご覧頂けます！

人形劇団プークとは・・・

1929年創立。2019年には劇団創立90周年を迎えた。東京・新宿には人形劇専門劇場「プーク人形劇場」があり、年間を通して公演を行っている。プーク人形劇場は2021年に50周年を迎えた。劇場を拠点に、全国での公演のほか、時には海外でも上演。映像部門の「スタジオ・ノーヴァ」ではテレビの人形劇製作に携わっている。

つくし野地域ふれあい基金とは・・・

「地域ふれあい基金」は、平成6年に東急不動産からつくし野1・2丁目自治会へ寄付された文化基金で、つくし野1、2、3、4丁目の住民の福祉、文化、環境等の向上や、住民のふれあいと親睦の増進のための事業に使用することと定められています。事業の企画や運営などを行うために「運営委員会」が設置されていて、住民の意見を反映するため、つくし野の4自治会から現在16名の委員が選出されています。

▶つくし野コミュニティセンター
〒194-0001 町田市つくし野 2-26-5

東急田園都市線「つくし野」駅下車徒歩１分。
駐車場がありませんので来所の際はバス・電車等をご利用ください。